

私がセンターに勤務した昭和57年からの二年間は、防災情報のニーズにどう対応するかということ、財政基盤をどうやって安定させるか、更にはセンターの施設をどう活用するかということが当面の大きな課題でありました。

防災情報のニーズにどう應えるかの問題は、当時のセンターの体制が充分でなかったこともあって、非常に苦慮したところでありましたが、消防庁のより高度な観点に立っての適確な指導によって切り抜けることができました。

その頃のセンターの財政は殆んどが船舶振興会の補助に依存していましたが、将来のことを考えるとどうしても自己財源を増やしてゆくことが必要でした。「地域防災データ総覧」「火災原因調査要領」を手がけたのもそういう願望がこめられていたのであります。

センターの建物は、三鷹のいわゆる“消防キャンパス”の中では一番立派です。しかし予算の面や、都心から離れているということ、更には宿舎等の関係で充分に活用されておらず、いわば「宝のもちぐされ」というような状態でした。何か利用できないかと考えた末、隣の消防研究所と提携してゆくことが、センターの将来にとっても得策なので積極的に消研の利用に供しました。

以上の試みは、希望したよう萬事うまく進んだわけではなくて、実現したのはほんの一部で宿題として多くを残さざるを得なかったことは今でも残念に思っております。

そのセンターが皆様方のご努力で日々充実してゆく姿を見ることは喜ばしい限りです。

ご承知のようにセンターは、消防研究所、消防大学校、日本消防検定協会と一緒に、三鷹の消防キャンパスの中にあつて、環境の極めてよい所であります。

鎌倉街道の名残りの木立が、キャンパスを二つに分けて貫いております。

春、桃の花に始まり、桜の花が續いて、木立の下では草ボケが目を楽しませてくれます。芝生の中にはもじずりが可憐なピンクの花を咲かせます。木立が緑を増してやがて黄ばんで季節の推移を教えてくれます。

都心より寒く雪がなかなか消えません。日陰に残った雪がすっかり消えたのが3月31日と遅かったことを今でも覚えております。

夏の暑い時も冬の寒い時でも、中庭で野球に興じたことが昨日のことのように思い出されます。

最後にセンターが機関紙「消防科学と情報」を発行するほどに充実したことに敬意を表するとともに、今後の益々の発展飛躍を祈念してやみません。

随 想

センター在勤二年間のこと

斎藤正夫

(副)消防科学総合センター四代目理事長